秋の詩歌作品展

２０１８年10月13日（土）～11月９日（金）
日本現代詩歌文学館喫茶室（フリースペース）

詩

「闘い」　小田島周子（黒岩）
「早池峰神楽」　兒玉智江（相去町）
「秋三題」　佐藤岳俊（奥州市胆沢区）
「―秋ならわたしが一番よ」　斎藤彰吾（本通り）
「柿学者」　佐藤春子（中野町）
「遠い秋」　高橋つか子（和賀町長沼）
「りんどうの花」　高橋トシ（和賀町藤根）
絹の道に旅立つ商隊に／積み込まれた柘榴は／密教の教典と共に訪らされ／修験の路をたどり／詩歌の森に暗い茜色として実る　山下正彦（大通り）
「燕」　渡邊眞吾（北鬼柳）
「コスモス忌」　渡邊満子（北鬼柳）

短歌

いちはやく紅葉はぢめしなつはぜにひそみてあそぶ四十雀のこゑ　伊藤淑子（和賀町藤根）
起きがけの冷気にひとつ咳すればたちまち近づく秋というもの　助川さち子（立花）
実生して二十年経つ柿の木はたわゝになりて夕日に映えぬ　高橋　香（和賀町藤根）
黄金のジパングここに現れしこの夏の酷暑を糧として　高橋くみこ（和賀町藤根）
ひとむらの川原の芒に近付けば雀の群れが瞬時に飛び立つ　高橋妙子（飯豊）
紅葉を堪能しつつ露天風呂八幡平は吹雪になりぬ　松川節子（常盤台）
色づける稲田の上を防除するドローンめぐるをまぶしみて見つ　八重樫励子（飯豊）
蝉に蝶鳥にもあらで秋アカネ飛行機に似て育つあこがれ　吉野千栄子（相去）
桜葉の上にいで立つ半月の生身の思ひ長月が影　和野内節子（青柳町）

俳句

奥羽嶺は雲を脱ぎけり威銃　小笠原文保（上江釣子）
草もみぢ石の遺跡をとり囲む　小原十三丸（和賀町横川目）
客を待つ雑草園の薄もみぢ　佐藤誠篤（下鬼柳）
観音の台座に群るる秋茜　菅原典子（川岸）
明日来る子らに栃の実集めたり　鉄本正人（口内町）
秋草の色の薄さを愛でしかな　藤本カヅエ（新穀町）

川柳

秋祭り笛や太鼓に稲穂揺れ　小田島眞知子（二子町）
甲子園九回攻防酔いしれる　菊池長作（二子町）
熱燗で秋の夜長の冷え癒し　筒井尚七（二子町）
秋祭り振るまい酒の梯子する　照井民太郎（九年橋）
生きる欲試めされながら秋の道　照井優子（藤沢）
松葉杖とれてうれしい澄んだ空　森　しずか（花園町）
長寿祭主催者側もみな長寿　山中満子（中野町）

（敬称略　各分野50音順）

協力　北上詩の会／北上短歌協会／北上・和賀地区俳句会連絡協議会／川柳北上の会